当科では過去5年間に成人腸重積症4例を経験した．上行結腸癌・回盲部癌によるものが各1例ずつ，術後イレウスの診断で開腹し腸重積と判明したものが2例である．重積部位は4例とも回腸→上行結腸型であるが，術後イレウスとして発症したうちの1例は開腹下での整復後2カ月目に再度回腸→回腸型の腸重積を生じた．

腸重積症は理学所見に乏しいため術前診断は画像所見によるところが大きい．CT による腸管内腫瘤像は本症に特徴的な所見であり，3症例で術前診断が可能であった．CT 所見を中心に若干の文献的考察を加えて報告する．

27）虫垂粘液腫による腸重積の1例

林　光弘・梅原　有弘（県立六日町病院 外科）
蛭川　浩史・広田　正樹

虫垂に腫瘍が発生することはその良悪性にかかわらず稀とされているが，今回我々はその中でも比較的少ないとされている虫垂粘液腫が重積症を併発した症例を経験したので報告する．症例は78歳男性，平成7年8月6日より食思不振，および腹痛出現，8月11日近医受診，右下腹部に腫瘤を指摘され当科紹介となった．初診時の腹部理学所見では右下腹部に軽度の圧痛と腫瘤を触知するも筋性防御は認めなかった．また，検血生化学所見ではCRP1.7 mg/dl と軽度の上昇を認めたが，他に異常値はなかった．しかし腹部超音波検査にて右下腹部の腫瘤に一致してリング状陰影を認めたため腸重積による腸閉塞を疑い，同日緊急手術となった．開腹所見では虫垂根部を先進部とした腸重積であったが用手的整復は困難であり，また悪性腫瘍による腸重積も否定しえなかったため右半結腸切除術を施行した．切除標本で虫垂粘液腫であると診断された．術後経過は良好で手術後第14病日目の8月25日に退院した．今回は術前の超音波検査が緊急手術決定に有用であった症例と考えられる．

28）女性虫垂炎と卵管炎との鑑別

高野　征雄・武藤　一朗（秋田赤十字病院 外科）
大谷　哲也・長谷川　潤

【目的】当科で入院治療された女性の急性虫垂炎例を検討し，保存治療する際の卵管炎との鑑別法を求めた．【対象】最近6年間に当科で入院治療された女性の急性虫垂炎106例（手術56例，保存治療50例）を検討した．【成績】手術例の術後診断は虫垂炎46例，卵管炎7例，大腸憩室炎2例，腸炎1例であった．この卵管炎例の術前病態を検討すると，1）悪心，嘔吐などの消化器症状が少ない，2）腸雑音の聴取可能，3）デファンスが少ない，4）肛門指診で子宮の圧痛を認めた．そこで保存治療された50例の内，腸炎，感冒症候群などを除外した39例を検討したところ，虫垂炎と診断されたのはわずか8例で31例は卵管炎であった．手術された虫垂炎例，保存治療された虫垂炎例，卵管炎例の三者間で術前の白血球数，入院日数に差はなかった．

【結語】保存治療された女性虫垂炎例の80％は卵管炎であったと考えられた．

29）急性虫垂炎手術例の検討

川口　英弘・山崎　俊幸（巻町国民健康保険病院外科）

【目的・対象】1987年3月以降当科で経験した急性虫垂炎手術例162例を対象とし，術前の状態から急性虫垂炎の重症度を予測できるかどうかを検討した．

【方法】虫垂炎の程度は① catarrhalis ② phlegmonosa ③ gangrenosa ④ perforation に分け，統計学的検討は χ^2test，対応のない Wilcoxon 検定，Kruskal-Wallis 検定を用いて行った．【結果】虫垂炎の重症度と関係のある因子は，発症から手術までの時間（p＝0.0003），白血球数（p＝0.0005），年齢（p＝0.0012），筋性防御の有無（p＝0.0405）で，初発腹痛部位では臍周囲部痛（p＝0.0499）で重症例が多かった．また男女比（p＝0.0757）や下痢の有無（p＝0.0961）でも傾向を示したが，Blumberg 徴候の有無（p＝0.3854），直腸・腋窩の体温差（p＝0.1117）や腹部超音波検査上所見のあるなし（p＝0.2204）では差は認めなかった．【結論】急性虫垂炎の重症度を予測する因子としては，発症から手術までの時間，白血球数，年齢，筋性防御の有無，初発腹痛部位（臍周囲部痛）が重要である．

30）急性虫垂炎における保存的治療の検討

川口　英弘・山崎　俊幸（巻町国民健康保険病院外科）

【目的・対象】1989年4月以降当科では，白血球数が13,000/mm^3 以下で筋性防御を伴わない急性虫垂炎症例に対し保存的治療を選択してきた．現在までに保存的治療を選択した79例を対象とし，保存的治療の妥当性につき検討した．【方法】以下の点につき検討した．① 保